

---

# 題名：サーカスの舞台裏

中宮寺 澪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

題名：サーカスの舞台裏

### 【Nコード】

N1836P

### 【作者名】

中宮寺 澪

### 【あらすじ】

煌びやかな衣装に装飾品。うなり声を上げる獣たち。がちやがちやとした極彩色の世界は、一瞬の輝きを世界に放つ。そして一際目立つのは、瑞々しく艶やかな魅力に満ちたハイドランジア。完結済小説、【氷の願望】と少しだけリンクした物語。

「小さな花の集合体だからこそだとも言つつもり？」

少女のようにひらひらとしたドレスを身につけた少年は冷めきった瞳で前髪をピンで留めた。目の前には大きなドレッサー、机の上にはあふれんばかりの宝石と化粧道具がぼんやりとしたライトに照らされてぎらぎらと光っている。密閉された空間は昼だろうが夜だろうが構わず薄暗く、今がいつたい何時なのかわかったものではない。そう言つと少年はつまらなそうにどうでもいいでしょ、と言つた。人形のような顔をして、人形のような姿で。今夜も少年は踊り続けるのだろうか。

「まるで僕のようにだと、そういいたいんでしょう。」

冷えた蒼い瞳は深海のようだ。その視線に射ぬかれて、ぞくりと背筋が泡立った。

「ハイドランジア。贗物。小さなものを積み重ねて大きく観せて、けれど本質はずっとちっぴけ。さらにそれは偽物ときた。うん、最高だね。」

何を納得したのか、自嘲ぎみに笑う少年の瞳は暗い。

ライオンのうめき声がする。がしゃんがしゃんと鉄が揺れる。生臭い吐息を浴びて、少年の姿をした少女がくるりとその場で回ってみせた。

「捻くれ者のシルベストレ、可愛そうに。」

「強情っ張りのグレーティア、泥を浴びる君よりマシさ。」

舞台裏の雑多な空気というのは異常なまでに濁っていて、脳が酸素ほしさにぐらぐらした。青年は対照的な彼等を見る。少年はドレスサーの前に座りこみ、少女はライオンの檻でくるくる踊る。嫌な匂いと香水のきついフローラル、化粧品の鼻をつく匂いに食べ残した砂糖菓子屑の屑。

「あたし、百合がよかったな。」

「僕はガーベラがよかった。ねえ、どうしてハイドランジアなの？」

ふたりの揃いの蒼い瞳が、じっとこちらを見つめる。青年はたじろぐ。彼等の魔力に、負けてしまいそうになる。冷たく、暗い深海のような、

「今が五月だからさ。」

己から出た言葉はひどくあつさりとしていた。二人の子供はキョトンとしている。

「五月には咲かないでしょう。」

「早咲きのさ。」

「嘘だわ。」

「ああ嘘だね。それじゃあ考えてごらんよ。何故、今ハイドランジアが咲いているのか。」

残酷なほどみずみずしい薄水色と薄紫はぼんやりと霞んでほのかに光っているかのようにだった。きらきらとした小さな花びらたちは先ほど咲いたかのように美しく、初々しく、処女のような秘めやかな甘さをもっている。

「シルベストレ、わかった？」

「グレーティア、僕らはきつとこの人にかかわれてるんだ。」

そう、これでいい。

このまま、このまま。

考えるようにその場に座り込んだ二人に笑みを向け、青年は静かに扉をしめた。

重すぎる音がじんわりと地底に響くように通りすぎると、二人とさまざまながらくたを閉じ込めた鉄の箱は巨大な装置に接続される。

「答えを教えてあげよう。そのハイドランジアは、去年の六月に永遠の命を得たのさ。」

【シュンカンレイトウカイシ、ハナレテクダサイ】

轟音。刹那、まるで何事もなかったかのように、夜空に星空が瞬く。

そして二人は、永遠に輝く氷になった。

「あ、もしもし。ご注文のオブジェ、来週にはお届けできそうです。ええ、ええ、それはもう、本物そっくりの出来です。みずみずしさを残したまま、ええ、悩ましげな表情の、はい。いやあ…それにしても素敵ですねえ…奥様が六月生まれで、そのお誕生日のプレゼントなのでしょう？はい、確かに咲くまで待っていたら間に合います。

んものねえ…二年ごしの、いやあつらやましいかぎりですよ。え？  
ああ、ライオンも。あ、タイトルはどうします？金のプレートで、  
はい。了解しました。ありがとうございます。はい、失礼します。  
」

巨大な鉄の箱はトラックへと運び込まれ、都会の夜景へとにじん  
でいった。青年はため息をつき、電話帳を開く。

「はい、もしもし、先ほどは失礼しました。いや、立て込んでまし  
て。はい。それで、ご用件は……はい？わが社はご注文通りに仕上  
げたつもりでしたが。え？娘の美しさを永遠に後世に伝えたい、と。  
はい。ですから、うちは彫刻だとかじゃないんですって。え？参考  
にするといって連れていかれた娘が帰ってこない？いやですよ、  
そんなの、」

今日の前にいるでしょうに。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1836p/>

---

題名：サーカスの舞台裏

2010年11月28日04時12分発行